

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	星のさと全体の共通理念である「一人一人に一人一人の介護を」をスタッフ全員で共有している。又、理念に基づくケアに繋がられるように施設独自の雲の用紙を活用している。	「一人一人に一人一人の介護を」という法人理念を各ユニットのステーションに掲示し共有と実践に繋げている。例年であれば、月1回、併設の老人保健施設と合同で行われる研修会の席上、振り返りの機会を設けているが、現在、新型コロナの感染が予断を許さないことから集団での密を避け、資料配布による研修が実施されている。また、利用者一人ひとりに合った寄り添い方を見出し、利用者の意向も踏まえ日々の支援に繋げている。家族に対しては利用契約時や面会時に理念に沿った取り組みについて説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で外部の方との交流を持つことが出来ない現状であるが、以前は地域の秋祭りや芸能祭に参加したり、地域の小学生がボランティアに来てくれたり、地域や学校もコロナ禍で活動は自粛している。	開設以来自治会に加入し、地域の方々には当ホームも含む複合施設の防災訓練時に救助応援として参加していただいている。また、例年であれば文化祭等、地域活動に積極的に参加し、合わせて地区の小学生や中学生の職場体験の受け入れ等も行ってきたが、現在、新型コロナ禍が長引き中止となっており残念な状況となっている。コロナが落ち着いた時には再開をしたいという意向を持っている。そうした中、ホームの周りの散歩の際には近くの住民の皆さんと親しく挨拶を交わしたり、一面に広がるリンゴ畑の近くを歩いている時にリンゴの差し入れ等も頂き、地域の中で親しまれるホームとして活動している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	以前は地域の方々と一緒に様々な場面で学んだり、考えたり、アドバイスをしたりしながら認知症に対する理解を深めると共に支援に繋がるような活動をしていたが、コロナ禍で思うような活動が出来ていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で運営推進会議を開催することが出来ないが、活動報告や評価での取り組み等について書面での会議とさせて頂いている。	例年だと2ヶ月に1回、対面での運営推進会議を開催しているが、現在は書面での開催が続いている。今年度の3回目の書面の内容として「まんがで学ぶ認知症の方の気持ちと介護者の気持ち」等に纏め、民生児童委員会、民生児童委員7名、南区区長、地域包括支援センター職員、家族代表に届け、認知症への理解を促し、また、意見・助言等をサービスの向上に繋げている。また、民生児童委員会、地域包括支援センター職員とはきめ細かく連携を取り、新型コロナの状況を見て対面での会議開催に繋げようとしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域包括支援センターとは様々な情報交換を行っている。尚、介護認定の更新代行手続きを行っているが、コロナ禍で延長申請としている。市のあんしん相談員の訪問もコロナ禍で現在は実施されていない。	地域包括支援センターが隣接していることから様々な事柄に付いて連携を取り合い、サービスの向上に繋げている。介護認定更新調査はコロナ禍により延長申請を代行し、調査員がホームに来訪し職員が対応している。市のあんしん(介護)相談員の来訪について現在中断されているが、再開後には積極的に受け入れを行う予定である。	

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「身体拘束をしないケア」を実践するために職員全体で創意工夫と試行錯誤を繰り返している。	法人の方針として拘束のない支援に取り組んでいる。帰宅願望の強い利用者があるが、優しく話を伺ったり、家族の協力も得て電話で話をさせていただき納得して頂いている。玄関は日中開錠されており、ドアの開閉を鈴の音で知らせるように工夫がされている。また、入居2週間を目安に環境に慣れて頂くという意味から、家族了解の下、必要性があればセンサーマットを使用し、馴れたら外すようにしている。そうした中、年3回、法人内で身体拘束及び虐待防止の研修会を開き、拘束に対する意識を高め支援に取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	スタッフ間で虐待が見過ごされることがないように、行動や言動をお互いに意識しあっている。又、利用者さんの心身の変化や言葉に注意を払っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、この制度を活用している利用者さんはおられないが、マニュアルをステーション内に置き、自由に見られるようになっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約及び改定時は書面での説明と口頭での説明を行い、理解、納得を頂いた上で同意のサインを頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者さんが職員に自分の思いを話しやすい環境にするために、日常生活の中でコミュニケーションを密に図り、信頼関係を築けるよう努めている。又、ご家族はコロナ禍で頻りに面会することが出来ないが、面会時に職員が近況を報告したりしている。	利用者一人ひとりに寄り添った介護に取り組み、関わる時間を多く取り、ゆったりとした時間を過ごしていただけるようにしている。家族の面会については今年の春頃はコロナも落ち着いていたことから短時間の対面での面会を行っていたが、現在、拡大傾向にあることから感染対策のため窓越しでの面会に戻させて頂いている。家族に対しては月1回の利用料の支払日に来訪した時や電話で連絡を取り、きめ細かく状況を報告している。そうした中、9月の敬老会には長野市消防団の音楽隊に来訪していただき利用者により易い楽曲を演奏していただく予定を立てていたが併設の老人保健施設でコロナ感染者が出て中止となってしまった。日を改め10月28日に行う予定となっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員は十人十色で、一人一人色々な意見や思いがある。それを前提に職員一人一人が相談しやすい姿勢でいるよう努めると共に、職員の思いを受け止めるよう心掛け、意見が反映できるよう努めている。	毎日の申し送り後、日々の支援の中で気づいたことを話し合い、業務に役立てている。また、毎月テーマを決めた勉強会を行い知識を高め、支援内容の向上に努めている。目標管理制度があり職員は年1回目標設定と自己評価を行い、管理者と総師長による個人面談が行われモチベーションアップに繋げている。更に、年1回職員対象にストレスチェックが行われ、法人としてメンタルヘルスにも力を入れている。	

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個々の能力や努力を評価し、賞与や処遇改善手当に反映している。プライベートな時間を大切に出来るように、残業は基本的に無しとし、希望休みは100%取得している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新入職員には業務指導確認表を使用しながら個々のペースに合わせた指導を心掛けている。内部外部研修はコロナ禍で出かけることは出来ないが、オンライン研修を出来る限り受講している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	長野県宅老所・グループホーム連絡協議会の会員、善光寺平グループホームねつとに参加しているが、コロナ禍で活動自粛している。参考資料や速報が送られてくるので活用している。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の事前面談の際に、ご利用者ご本人から色々な話を聞き取り、コミュニケーションを図ることで安心感や信頼関係を築く一歩となるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込み時に困っていること等を聞き取り、契約時にはケアに対する要望や意向を聞いて、それを受け止め、良い関係が築けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前面談の際、必要な情報収集をしサービスの導入に努めると共に、申し込みに来る段階でご家族は精神的ストレスやこれからの不安を抱えているので、どのような介護サービスが必要なのか見極めながら提案している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	小規模ならではの顔見知りで安心できる関係を築いていく中で、利用者さんの“思い”に耳を傾け心を寄せることを大切にしています。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者さんの状況を細目に連絡し、対応方法を相談したり、方向性を示したりしながら施設に預けているから…ではなく“施設にいるけど一緒に”という姿勢で努めています。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や姪御さんに手紙やハガキを書いて送ったり、家のこと等で気になることがあれば電話をしたりしている。利用者さんの中には携帯電話を持たれている方もおられる。	新型コロナ禍が続き、友人や知人の面会についても自粛している。そうした中、友人より手紙やハガキが来る方がおり、返事を出している。また、携帯電話を持つ方もおり、家族と話をされている。加えて、顔馴染みの福祉美容師の来訪が3ヶ月に1回あり「カット」や「カラー」をして頂いている。更に、年末には職員と共に手作り年賀状を作成し家族宛てに出している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者さん同士の相性があるので、様子観察をしながら席を離したり、時には職員が中に入って場を盛り上げたりしている。利用者さん同士でも持ちつ持たれつ、頼り頼られの良い関係が出来ている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	隣接の老健に移られた利用者さんを見かけると、挨拶したり声をかけたりしてコミュニケーションをとっている。ご家族とは窓口でお会いすることもあるので、状況を話したりして関係を継続している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関りから、利用者さんの思い等を聞けるようなコミュニケーションをとることを心掛け、雲の用紙に記入したり介護記録に記入したりして、思いや暮らし方の意向の把握に努めケアについて検討している。	アットホームな雰囲気大切に利用者一人ひとりの持っている力量を引き出し、家でやっていたようなことをやっただき希望に沿えるようにしている。意思表示の難しい方がいるが、優しく声がけ、表情、仕草、笑い顔などから希望を受け止めるようにしている。日々の関わりの中で気づいた事柄についてはその都度介護記録に残し、申し送り等で情報を共有し、利用者の意向に沿えるようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に本人・ご家族・ケアマネ・サービス事業者の各方面から、これまでの暮らしや他の利用者さんとの関係等を情報収集し、これからの暮らしに役立つよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	環境が変われば過ごし方も違って来るし、その方の生活に対するこだわり等は変わらずなので、一人一人をよく見て、体調・有する能力を含めて現状の把握と職員間でも情報の共有に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	雲の用紙や日々の会話から本人の思いをくみ取り、申し送りやカンファレンス等で職員の意見交換を行い、ご家族とは状態に応じて面談して意向を聞いたりしながら介護計画を作成している。	主任は2名の利用者を、職員は1名の利用者を担当し、居室管理、足りない物の補充、誕生日会の準備等を行っている。介護計画の更新時に合わせ、申し送りの後や昼食時にサービス担当者会議を開き意見を出し合い、モニタリングも行き、家族から聞きいた要望も加味しながらプランの作成に繋げている。また、入居時は2週間の暫定プランを作成し、様子を見て本プラン作成に繋げている。プランの見直しについては短期目標を3ヶ月とし、状態が安定している場合は1年で見直しを行い、状態に変化が見られた時には随時の見直しを行い、一人ひとりに合わせ支援している。	

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	申し送りで実施したケア内容やその後どうなのか…を話し、気づきや工夫したこと、日々の様子を個々のカルテに記入し、情報の共有や介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	訪問歯科医・歯科衛生士の利用、必要に応じて隣接している老健の理学療法士に福祉用具や体交枕等のアドバイスや管理栄養士に食事やおやつ形状等、その状態に応じたアドバイスを受けニーズに対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の民生委員さんや区長さん等が運営推進委員のメンバーとなって関わって下さっている。現在はコロナ禍で皆さん行動自粛されているので支援に繋げることが出来ない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は契約時にご希望を伺いながら決めている。かかりつけ医とは情報の共有に努め、体調の変化等は細目に報告し連携を図り、適切な医療が受けられるよう支援している。	入居時に医療機関についての希望を聞き、ホームとしての取り組みを説明している。現在、全利用者がホーム協力医の月1回の往診で対応し、受診に出掛けることもある。医師より重要な話がある時には家族に受診に同行していただいている。ホーム職員の看護師と併設老健の看護師により日々の健康管理が行われており、合わせて医師との連携も図られ、万全な医療体制が整えられている。歯科については必要に応じ協力歯科と歯科衛生士の来訪があり、口の健康にも取り組んでいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職員として看護師が勤務しているので、職員は状態の変化や気になることを常に報告したり相談したりしている。かかりつけ医とも連携を図り指示を受け適切な医療が受られるよう支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にはサマリを提供し、退院の目途がついた時点で、医療連携室から現状のADLを含めた情報の提供を受け、早目の退院受け入れの準備をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時には重症化や見取りについての説明を行い意向を聞いているが、その時、その状態に直面すると意向や思いは複雑で揺らぐ。必要に応じて、その都度意向を確認しながらかかりつけ医とも連携を図り、ホームでできる支援に努めている。	重度化、終末期に対する指針があり、利用契約時に説明し同意を頂いている。状態に変化が見られ、終末期を迎えた時には家族、医師、看護師、ホームで話し合いの機会を設け、家族の意向を確認し、医師の指示の下、改めて看取り同意書にサインを頂き、医療行為を必要としない限りにおいて看取り支援に取り組んでいる。この1年以内に2名の方の看取りを行い、好きだった洋服に着替えていただき、新型コロナウイルスではあったが家族には感染対策を取った上で居室にて最期の時を共に過ごしていただいたという。そのうちの、1名の方は家族の迎いの車で自宅に戻り葬祭を行い、家族からも感謝の言葉を頂いている。職員は看取り後に振り返りの機会を設け、経験を次回に繋げる様にしている。	

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時及び事故対応マニュアルを作成してある。又、急変時に救急搬送が必要になった時に誰でもすぐ活用できる情報提供用紙を個別に作成している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域とは火災や災害時に関わる協定を結んでいる。又、年2回(春と秋)ある避難訓練のうち1回は地域の消防団や民生委員の皆さん、区長さん、ご家族等の参加協力を頂き実施しているが、コロナ禍で応援依頼は自粛している。	併設の老人保健施設と合同で年2回防災訓練を実施している。7月には近くの山が崩れた土砂災害を想定し、利用者全員が法人内のロータリーまで移動しての避難訓練を行っている。また、地域の避難所である近くの小学校まで移動しての避難訓練なども予定している。10月か11月にコロナの様子を見て火災を想定した避難訓練、通報訓練、消火訓練を予定し、運営推進会議のメンバーにも参加していただく予定を立てている。合わせて緊急連絡網の確認訓練も行う予定をしている。備蓄として併設の老人保健施設に「食料品」「介護用品」「発電機」等が準備されている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉使いには十分気を付けている。プライバシーは個々の大切な事なので、声の大きさや話す内容に注意すると共にお年寄りに対する尊敬の念を常に持つように申し送り時やミーティング時に話している。	言葉遣いや接し方には特に気配りをし尊敬の念を込め優しく接するようにしている。特にトイレ介助の際には大きな声で誘わないように気を付けている。合わせて利用者の前では他の利用者の話しはしないよう徹底している。呼び掛けについては基本的に苗字か名前を「さん」付けでお呼びしており、過去には希望に合わせ「ばあちゃん」とお呼びした方もいた。入室の際には「ノック」と「声掛け」を忘れないようにし、プライバシーに配慮した支援に徹している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いを伝えたり、自己決定ができるような声掛けをするように気を配っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日をどのように過ごしたいか…の思いを大切に、「ご飯を自分の部屋で食べたい」と言われたら、無理に食堂で皆と食べるのではなくお部屋で食べて頂いたり、「お部屋で横になりたい」と希望があればゆくりして頂いている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その日に着たい服を選んで頂いたり、希望により髪をカットしたりカラーやパーマをかけておしゃれが出来るよう、訪問美容をお願いしている。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者さんの中で何となく決まった役割があり、それを活かしながら食事の準備から片付けまでを一緒にやって頂き、“ありがとう”とお礼を伝えると、うれしそうな笑顔を見せてくださる。	自立の方が大半で、全介助の方が若干名という状況である。献立は併設の老人保健施設の管理栄養士が立てた季節感が加味されたものを用い、利用者一人ひとりの力量に合わせ、包丁を使い野菜の下準備をする方、味見、盛り付け等をされる方、後片付けをされる方等、職員と共に調理を楽しみながら行っている。新型コロナ禍が続く外食が難しい状況が続いているが、ホームの行事の際には「すき焼き」「鍋料理」「麺類」等を楽しみ、誕生日には「ケーキ」にプレゼントを添えて楽しいひと時を過ごしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	隣接している老健の管理栄養士が立てた献立なのでバランスの摂れた食事内容となっている。食事量の少ない方は、高カロリー食を補助食としたり、水分摂取量が少ない方は水ゼリーを飲んで頂いたりしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	職員の歯科衛生士が関り、利用者さんの口腔内の状態を確認したり、何処か不具合があれば協力歯科医師に報告して指示を受けたり、必要に応じて往診日を調整したりと連携を図っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者さんの様子(そわそわする等)を見てタイミングよく声掛けを行い、失敗なくトイレでの排泄が出来るよう促したり、排泄ボードを活用して個々に合わせた支援をしたり、オムツでもトイレに座って排泄をして頂くように努めている。	自立されている方は半数弱で布パンツを使用し、一部介助の方は数名でリハビリパンツとパットを併用し、全介助の方は若干名でおむつ使用となっている。職員は利用者一人ひとりのパターンを把握しており、排泄表(ステーションに排泄ボードが掲示されている)も参考に状況に応じトイレに誘導している。排便については2~3日ない場合にコントロールを行い、「お茶」「お茶ゼリー」「梅ジュース」「スポーツドリンク」等で1日1,000cc以上の水分摂取に取り組み排泄に繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分を多く摂取して頂いたり、ゴミ出しを職員と一緒にしながら散歩したりしている。又、乳製品の訪問販売が来るので便秘解消のために乳酸菌飲料やヨーグルト等を購入している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	個別のシャンプーを使用したり、菖蒲湯やゆず湯等、季節を感じたり爽やかなにおいを感じてリラックスしたりしている。又、入浴を拒否される時は声掛けをするタイミングをずらしたり、別の日にずらしたりして意思の尊重をしている。	一部介助の方が大半で、全介助の方が若干名という状況である。週2回、入浴を行い、状況に合わせて併設老人保健施設のミスト浴も利用している。入浴拒否の方が数名いるが、時間を変えたりしてお誘いし入浴していただいている。また、B棟の浴室には浴槽が2ヶ所完備されており、仲の良い利用者が誘いあって楽しみながら2人で入浴している。「ゆず湯」「菖蒲湯」「バラ湯」等も行い季節感を味わい、入浴剤も使用し香りを楽しんでいる。更に入浴後には「梅ジュース」「スポーツドリンク」等、冷たい飲み物を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者さんのペースで休んで頂いたり、夜眠れないときはホットミルクを飲んで頂いたり、リビングで職員と話をしたりして気のすむまで共に過ごして頂いている。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の用法や容量及び、使用目的や副作用が分かるようにファイルを作成してあるのでいつでも確認できるようになっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	天気の良い日には渡り廊下で日向ぼっこをしながらお茶を飲んだり(通称 女子会)笑って話をしたり気分転換をしたり、農作業が好きな方は草取りや野菜のお世話を職員と一緒にしたり、家事参加をしたりと役割を持ったり楽しいと思えるな日常が送れるように工夫している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	個別ケアとして外出やお買い物等、希望される時は日程を調整して支援していたが、コロナ禍で外出は出来ていない。	外出時、自力歩行の方と車いす使用の方がそれぞれ半数弱、歩行器使用の方が若干名という状況である。ほぼ毎日の日課として併設の複合施設のごみ置き場までゴミ出しに出掛けている。また、天気の良い日には広い施設の敷地内を散歩したり家庭菜園で収穫したり、外気浴を楽しんでいる。「梅」や「イチジク」の実の成長を見たり、収穫等も楽しんでいる。新型コロナ禍が長引き、外出が難しい状況が続いているが、今年の春にはドライブを兼ね桜の名所でもある近くのお寺や茶臼山公園の桜並木の見学に出掛け楽しいひと時を過ごした。新型コロナの様子を見て紅葉狩りなどに出かけたいという意向を持っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個別でお財布を持ち、ホームに来る乳製品の訪問販売等から好きな物を購入している。毎月収支報告書を作成しており、残金の確認をご家族と一緒にして頂き、サインをして頂いている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族から電話がくる方もいれば、利用者さんから電話をする時もある。又、手紙やハガキを送ったり年賀状を送っている方もおられる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホーム内はいつも四季を感じる事が出来るように、お雛様、クリスマスツリー、兜などを飾ったり、手作りの作品を飾ったりして温かい、その場所に居れば心地よく安心していられる空間になるよう工夫している。	周りを一面のリング畑に囲まれ四季の趣が味わえるのんびりした環境の中で日々の生活を送っている。施設内は十分な広さが確保され、天井も高く開放感が漂っている。ホールの随所には観葉植物が置かれ、壁には季節に合わせた飾り付けや利用者と職員が共同制作したフォトフレームが数多く飾られている。また、共用部分には床暖房が設置されており、冬も快適に過ごせるようになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビの前には大きなソファがあり、気の合う人と座っておしゃべりしたり、リビングには新聞が置いてあるので、新聞を読んだりチラシを見て「これたべたいなあ～」と話をしたり、塗り絵やパズルをやったりと、ひとりで何かしていても寂しくない居場所になるよう工夫している。		



グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自分の家で使っていた思い出のある物や馴染みの物を持ち込んだり、家族の写真を飾ったりしている。沢山の物に溢れている居室もあれば、すっきり片付いている居室もあり、それぞれの個性が出ている。	十分な広さが確保された居室入り口には家族が用意した「のれん」が掛けられ、居室内は洗面台と大きなクローゼットが完備されている。また、半数の居室はトイレも設置されておりプライバシーに配慮された造りとなっている。持ち込みは自由で、家族と相談の上、椅子、ハンガーラック、テレビ、時計、趣味の本などが置かれ、自由な生活を送っていることが窺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホームは全館バリアフリーになっていて、坪庭を中心に壁には手すりも付いているので、自由に歩いたり車椅子や歩行器でも安心して自走できる。又、居室やトイレの場所に迷わないように看板等をつけて目印になるように工夫している。		